

金曜日の会 報告

- 1 期日 1月22日
- 2 場所 倉敷労働会館
- 3 参加者 O、AK、AS、AR、YO
- 4 内容

『あとかくしの雪』解釈 AK AR

『世界一美しいぼくの村』解釈 O AS

『多色版画』AK

『木版画』AS

○『世界一美しいぼくの村』では、21段落の父さんのセリフは、予定していたことなのか、思いつきなのかという問題について考えました。結論は、予定していたものです。4段落の『でも、今年の夏、兄さんはいません。』から、例年ならヤモと兄さんで競争しながら果物の収穫を楽しむ時期のはずなのに(3段落)、兄の出征のためにそれができないヤモの心情が表れた態度を見て、父はたまらなかつたと思います。そんなヤモへのサプライズとして、父は羊を買うと決めていたと考えました。それが『そんなヤモを見て』につながります。もうけたお金を全部使っても、父はヤモを元気づけようとしたのです。結果は、父の狙い通りにヤモは『大喜び』をしています。一つの謎をもとに、関係ある問題や気になる言動をつないで考えてみることの大切さを改めて感じました。

○『あとかくしの雪』では、旅人が『なんにもいらんぞ』と言っているのに、『けれども、～もてなしてやるもんがない』と考えた原因を探ってみました。うちに上がった後で、百姓がしたこと(行間)をイメージし、それでも大根を盗んだ原因を考えた時、2段落と関係のある旅人の芯から凍え命の危険にひんしている体の状態があったことや今の百姓のうちにあるものでは事態が変わらなかつたことを読む必要があります。つまり、旅人の冷えきった身体を、奥から暖めるために大根を焼いて食べさせるしかないと百姓は判断したのです。また、『その晩さらさら雪はふってきて』の『は』からは、何か雪に意志があるように感じられました。神様の仕業なのかもしれません。

○版画作品を制作する上で、何が追求の要素になるのかを考えてみる必要があります。これは、全ての作品作りに関係のあることです。文責 YO